寄　稿

畜産物需要回復のための安全性確保とその担保対策

九州大学大学院　農学研究院
教授　甲斐　諭

最近の畜産物市場の動向を見ていると、「三つの嵐」が吹き荒れて、需要を減少させ、畜産物価格を下落させているように思える。第一の嵐は「不況の嵐」であり、第二の嵐はＢＳＥに起因する過剰なまでの「不安の嵐」であり、第三の嵐は食品の産地表示偽装による「不信の嵐」である。

三つの嵐に対応して「三つの競争」が、いま、畜産業界では求められている。それは「コスト競争」、「安全性確保競争」、「信頼性回復競争」である。従来のコスト競争に加えて、食の安全性を確保し、消費者に安心感を与えて購買意欲を引き出す安全性確保競争が今まで以上に強まっている。さらに、安全性やブランドが信頼に足るものであることを保証する信頼性回復競争が必要になっている。

昨年九月のＢＳＥ発生直後には、行政上の混乱があった。しかし、その後は、素早い行政対応がなされ、食肉処理場において全頭検査を実施するなど、世界最高水準の安全性が確保されたこともあり、四頭目のＢＳＥ感染牛が確認されても大きな混乱はなく、価格の下落も大きくはない。消費者の信頼が徐々に回復している証である。

ところで、ＢＳＥ感染牛の確認頭数が少ないのは、高齢の乳用牛を数多くの食肉処理場が受入れていないことに起因している。このまま高齢乳用牛が牧場で飼養され続けると、酪農経営を圧迫し、今年の夏には、生乳不足が発生する心配がある。例え、新たなＢＳＥ感染牛が発見されても、その肉は市場に出回らないことをより強く消費者に浸透させ、牛肉消費の減退が発生しないようにすることが肝要である。そのような安全性対策の理解促進を図った上で、また酪農家への支援を保障した後で高齢乳用牛の処理を促進する必要がある。

だが、ＢＳＥ感染の原因はいまだに未解決である。確認された四頭の感染牛はほぼ同時期に生まれ、しかも同一の代用乳が与えられていたという。それならば、同時期に生まれ、同一の代用乳を与えられた牛を徹底的に検査するのが、ＢＳＥ清浄国に復帰する早道である。

四頭の感染牛に与えられていたという群馬県内の同一工場で製造された代用乳の原料調査は実施されているのであろうか。我が国のＢＳＥがなぜ発生したのか、海外から輸入された感染肉骨粉によるものか、国内で飼養されていた羊に起因するものか徹底的な解明を期待したい。

さらに、畜産物に対する消費者の信頼を回復するには情報の提供もまた肝要である。平成十二年にＢＳＥ感染牛が百六十一頭見つかったフランスを昨年の暮れに調査した。まず、驚いたのは、パリの地下鉄の駅構内や市内のビルの壁面に、畳六枚程度の大きな牛肉の写真と「国産牛肉は安全です」と書いたポスターが数多く掲示されていたことである。

カルフール（量販店）の店舗に行ってみた。牛肉には、牛の出生地、肥育地、と畜場番号、加工処理施設番号のシールが貼られ、店頭にはシャロレー等の牛の品種の写真と説明文も大きく掲示されていた。農場から食卓までのトレイサビリティー（追跡可能性）が確立しており、流通末端の量販店において生産・加工・流通の情報が消費者に伝達される仕組みになっていた。

関係業界が一丸となって牛肉消費拡大に努めた結果、消費水準はＢＳＥ発生当初の四〇～五〇％減少から、今では五～一〇％の減少水準まで回復してきたと関係者は言っていた。消費者の信頼回復が最重要である。

E-mail:satokai@agr.kyushu-u.ac.jp